

愛知万博開催から 20 年へ

—— 中村利雄事務総長と万博の意義、課題を検証

「大阪・関西万博は準備の正念場。愛知の成功から学ぶべき戦略とは」



中村利雄（なかむら・としお）1946年名古屋市生まれ。70年名古屋大学卒業、通商産業省（現経済産業省）入省。大臣官房総務審議官、貿易局長、中小企業庁長官を歴任。03年の2005年日本国際博覧会協会事務総長に就任。清算終了に伴い07年退任し、同年日本商工会議所専務理事、16年から公益財団法人全国中小企業振興機関協会会長。イベント学会（事務局・東京）の会長も務める。

2005年愛知万博（日本国際博覧会、愛・地球博）開催から来年で20年。1851年、ロンドンで第1回万国博覧会が開催されて173年。大規模博として日本では1970年の大阪万博、35年後の愛知万博などを通して世界に情報発信してきた。そして愛知から20年目と時を同じくして大阪・関西万博が来年4月に開幕しようとしている。21世紀初の万博を成功裏に導いた中村利雄・愛知万博事務総長に愛知での体験的万博論を語っていただき、万博開催の意義、成功の条件などを検証した。

愛知万博は2005年3月25日—9月25日、現長久手市、豊田市、瀬戸市の名古屋東部丘陵で開催。テーマは「自然の叡智」（Nature`Wisdom）。当初計画では入場者数1,500万人だったが、実績は2,205万人。会場建設費は1,350億円の計画から1,453億円に膨らんだが、差額は現物寄付で賄われ、結果的に約140億円の黒字だった。共立総合研究所の試算によると、万博による東海3県の経済効果は1兆2,800億円とされている。

成功か失敗か。収支はともかく、愛知万博の成否はプロセスを含めて今なお、相反する見方

がある。中村事務総長は「成功だったと思っています。05年6月、私も出席したBIE（博覧会国際事務局＝国際博覧会に責任を持つ国際組織）総会で祝意と賛辞の宣言をいただいた。万博史上初めてのことで、博覧会に対するポジティブなイメージを一般の人々に伝えている点が特に評価されました」と話す。評価の背景には愛知以前の万博の危機的状況がある。1995年のウーン（オーストリア）とブタペスト（ハンガリー）の共同開催万博はウーンが住民投票の反対多数で中止を決定、ブタペストも単独開催を見送り、開催権を返上。